



〒663-8558 西宮市池開町6-46

武庫川女子大学言語文化研究所

TEL 0798(45)3536

FAX 0798(45)3574

<http://www.mukogawa-u.ac.jp/~ILC>

ことばにまつわる笑い話

【言語文化セミナー（2001.11.28開催）の報告】

言語文化研究所では、毎年1回「言語文化セミナー」という会を開いています。この会では、ある一つのテーマについて講師の先生にお話しいただき、参加くださった学内外の人たちと、ことばについて、さまざまな角度から考える場となっています。

今年度は、野村雅昭先生（早稲田大学教授）においでいただき、落語の表現とユーモア」というテーマでお話しいただきました。お話は、落語のビデオを使い、その表現分析を通して、おかしさの仕組みをあきらかにしようというユニークなものでした。分析の対象となったのは、十月初めに亡くなった古今亭志ん朝が演じる『火焰太鼓』。志ん朝の話術に潜むユーモアを、野村先生は、文体ならぬ話体のレトリックとして明快に分析してくださいました。さらに、志ん朝とその父、志ん生との違いといった話も織り交ぜて話され、落語好きの参加者には一層興味深い話となりました。

学外からは五十名近い参加者がありましたし、本学の学生の中には、落語を見るのが初めてで楽しかったと話してくれた人もいました。そのほか、「落語の表現を分析するおもしろさを知った」「ことばのもつ力について考えさせられた」などの感想も頂戴しまして、日本語の力を分析することが目的の当研究所としては、わが意を得たりという思いがいたしました。

さて、このように、今年度のセミナーは、落語を題材として、参加者の人たちと、普段とは違った角度から笑いをとらえる機会となりました。

では、わたしたちの日常生活の中での笑いはどうでしょうか。ことばにかかわることで笑った経験は、だれにでも一度や二度あるのでは…。

今回のレポートは、「ことばと笑い」という、身近な題材がテーマです。言い間違いや聞き間違いあるいは思い込みといった、ことばにまつわる笑い話を、LC倶楽部*の人たちから募集しました。その結果、24名の方から、約70件の笑い話をいただくことができました。名言・迷言、さまざまな内容です。その寄せられた体験談の中から、いくつかをご紹介します。

*LC倶楽部：現在55名。一般の方々と、ことばを通して交流をはかる場です。会員の方には刊行物の送付やセミナーなどのお知らせをしています。現在会費無料です。

◆聞き慣れないことば・特殊なことば

<知識の間違い>

- ・小学生の時、「玄人はだし」のことを「くろうとは出し」「苦労と裸足」と語の区切りを間違えて暗記していた。
- ・「頌春」を「こうしゅん」だと思い込んでいた。こうしゅんと入力しても変換されないのが馬鹿なワープロだと思っていた。
- ・合従連衡(がっしょうれんこう)を「ごうじゅうれんこう」だと確信していた。
- ・小学生のころ、友人が「耳鼻咽喉科」のことを「じびおえつか」と読んでいた。
- ・後輩が校正作業をしていて「私儀」を「わたくしぎ」と読めず、「しぎ」ということばは辞書に載っていない。仕儀あるいは私議ではないか」と注が入っていた。

<言い間違い>

- ・バイトでお客さんに「ひや」と言われて、カウンターで「おひや」と丁寧に言ったつもりが、酒→水に変わっていて怒られた。同じ酒なのに「かん」と「ひや」と「冷酒」があって難しい。

<聞き間違い>

- ・小学校2年生の女の子がビデオの時代劇を見て、「お漬物って悪いの？」と聞くので、ビデオを巻き返すと、殿様が「この、うつけ者めが」と家来を叱っていた。

<その他>

- ・禿げた人のことを「はげちゃびん」と言ったら、6歳年下の男の子は「何それー」と言って笑い出し、年の差を感じた。

◆ことわざ・慣用句

<知識の間違い>

- ・「気のおけない仲」というのを仲が悪いことだと思っていた。
- ・旅行に行きたい中学生の女の子が、「かわいい子には旅をさせよ」とことわざを持ち出して両親に迫ったらしい。
- ・兄が中学生の時、「船頭多くして船山に登る」ということわざを「船山(ふなやま)に登る」と家で叫んでいた。
- ・「骨折れ損のくたびれもうけ」の事を、「骨折れゾンビのくたびれもうけ」と思っていた。

◆こども

- ・長男が幼稚園に上がる前のころの話。台所でお手伝いをしていて、母親に「〇〇をオープンに入れてちょうだい」と頼まれた。二つあるオープンのうち大きい方に入れようとして、母親からそちらではなく小さい方のオープンに入れるよう言われたところ、「こちらはオープン」だと言った。
- ・長男の幼少時、一緒にお風呂に入っていたところ、「その草は何？」と、自分にはないものについて尋ねられ、吹き出したことがあった。
- ・長男の幼少時、池の水面の虫を指して「あれ何？」と聞くので、「あめんぼよ」。すると「僕とおんなじ?」。(甘えん坊だったので、みんなからそう言われていた)。
- ・幼稚園くらいの時、「暑中お見舞い申し上げます」ということを「しょっちゅうお土産あげ

ます」ってどういう意味？と聞いて大笑いされた。

- ・子どものころ、自動販売機の事を「じどうはんばえき」と言っていた。駅前にあるから…。
- ・小学校3年生位の時、ラ行とダ行の区別がつかず「レコード」「ドーナツ」「ラジオ」など、濁点のあるなしを「どっちのレ？」と尋ねていたらしい。
- ・カタカナが読めるようになった園児の孫が、「オスメスランチのポスターが出てたよ」と言う。確かめると「店長のオスメスランチ」だった。

◆外国語・外国人留学生

- ・母「ディズニーシーができたんだって」。わたし「えっ？じゃあ、ランドがA？Bってあったっけ？」。母「はあ？シーって海のことやで」。
- ・映画「シックスセンス」を友だちの前で「シックスセンテンス」と大きな声で言ってしまった。
- ・終戦後、中学生だった私に進駐軍のアメリカ兵が、持っていた弁当箱を指して「これは何だ」と聞いた。「ライスボックス」だと答えると大笑いした。Riceは米だが、Liceはしらみの意味で、LとRの発音の違いだった。
- ・日本語学校で「新聞」のふりがなが「あたらふん」となっていた。
- ・留学生が郵便局の窓口で小包の中身を聞かれ、「これは本です」と答えた。後で「先生、このセンテンスを使うのは教科書以外で初めてでした」。

◆音が似ていることば

<聞き間違い>

- ・「財務省」と「外務省」を聞き間違えて会話が通じないことがよくある。
- ・JRの車内で「乗り降りには前の方に続いて順序よく…」を「お料理は前の方に続いて順序よく…」と聞き違えた。
- ・母が妹と電話をしているときに、妹が「今、ワッフル買ってるから…」と言ったのを「今、マッスル買ってるから…」と聞き違えていた。
- ・岸田さとしの歌で「morning morning君の朝だよ…」というフレーズを、母は「操み操み君の肩だよ」に聞こえると言っていた。

◆音の転倒

- ・友人が「御無沙汰」のことを「ごぶたさ」と言っていた。
- ・友人は「その店なら行ったトコある」「あそこも前に行ったトコある」と「こと」と「とこ」を取り違えて覚えていて、何度か違うよと言ったが意に介していない。

◆敬語

- ・就職活動中、人事の人に話すとき、敬語を意識しすぎて「おやりになられていらっしやる」などと敬語を過剰に使ってしまった。
- ・店で「お持ち帰りですか？」と尋ねられて「はい、お持ち帰りです」と自分に対して敬語を使ってしまった。

◆その他

<読み間違い>

- ・トラックなどの車体に書かれている社名など、右から読むのか左から読むのかで読み間違える。右から左に「コープの健康食品」と書かれているトラックを見て、「プーコの健康食品」という店があるのかと思い、「違うわ～」と気がつく。「入間もやし」を「もやし人間」と読んだ。どうやら、同じ文字種をまとめて読み、その後、異文字種の語を合成し、全体を読んでいるようだ。
- ・秋になり、「秋本番」ということばを目にすると、「秋本」姓の我が家では「あきもと ばん」という人物の事かと思ってしまう。

<双方の解釈の違い・方言>

- ・小中学校時代、とてもかわいいことを「バリかわいい」と使っていて、どこでも通じると思っていたら、中学の修学旅行でバスガイドさんに「バリって何かが割れた音なんですか」と言われた。
- ・知人宅でご馳走になり、デザートに大好きなみつまめが出た。いかがですかと問われ「いやー結構ですなー」と答えたところ、下げられてしまった。
- ・祖父が「アイスでも買って来るわ。何がいい?」と聞いたので「モナカの」と答えたら、和菓子のモナカを買って来てくれた。「アイスモナカ」と言えばよかった。
- ・私が調理した夕御飯を「いい加減にできている」と言ったら、妻も次男も「よう出来ていて、これはいい加減じゃない」と言う。いい加減の解釈は、私(熊本出身)は、加減がいい(加えたり、減らしたりの調整がうま出来ている)ことの意味だったが、二人はでたらめな出来栄えと受け取った。
- ・幼いころ、徳島のおばさんに「そこたっといて!」と言われ、しばらくおばさんが指さしたドアの前で立っていた。方言で「ドアを閉める」ことだったらしい。

<その他>

- ・国語学の演習中に「オトン」「オカン」と「オジン」「オバン」ということばが問題になり、このような省略形は「オカアハン」「オバハン」という形から生まれたのではないかという考えが出され、「オジハン」という言い方はしないという指摘などもあった。そして、みんなが並んで順番を待っているのに平然と列に割り込んで来るのが「オバハン」という定義(?)が出されてから、それぞれの語形の違いにひとしきり話はずんだ。

笑いの性質を分類するには、ややデータが少なかったというのが反省点です。全体的には、ことわざや慣用句を含めて、聞き慣れないことばや特殊なことば、外来語、難しい漢字などが勘違いのもとになりやすいようです。また、こどものことばには、その柔軟で突飛な発想に、おかしさが認められるようです。

《あとがき》 このほかにも、自作の俳句・川柳・なぞなぞ等を送って下さった方もいらっしゃいました。紙面の都合上、話の内容を変えない程度にまとめたり、載せられなかったりしたものもあります。また、お名前は省略させていただきました。なにとぞご了承ください。最後に、笑い話を提供してくださった皆様に、熱く御礼も申し上げます。

[担当] 佐竹秀雄・岸本千秋 2002. Feb.